

# 満州佐伯村おぼえ書 (続)

## 第十次昌図佐伯開拓団小史

矢野徳弥

(会員・南海郡本匠村)

はじめに

満州佐伯村のことについては、故人となられた羽柴先生の勧めで、『佐伯史談』百一号(昭和五十年七月)から百二十号(昭和五十四年十月)まで載せて頂いた。五年に及ぶ連載であったが、この時は一応建設段階の記述に止どめ、敗戦以後のことは後日の課題とした。準備の不足もあったが、敗戦の混乱の中で生じた幾多の悲惨な事実を明らかにするには、なお暫くの時間が必要と考えたからであった。

それからすでに十五年、事件から早くも四十六年が経過し、関係者の記憶も風化が進み、冷静に過去を振り返る心の余裕も生まれたと見られる今、再び筆を取り、

『満州佐伯村おぼえ書』(続)として、その崩壊の過程を辿り、明治国家の大陸政策と運命を共にした郷土編成の開拓団の、短く小さな歴史を完結させたいと思う。

満州佐伯村の、昭和二十年八月の敗戦から翌二十一年七月の内地引き揚げに至る苦難の記録は、元開拓団長矢野武吉の手記『佐伯村遭難記』として残されている。

今回、満州佐伯村の敗戦後の歴史に筆を進めようとして、何を中心とするか……種々苦慮したが、当時の責任者の手になるこの記録を主体に、これを補完・解説する形が最も適当と思われ、全面的にこの資料に依存することとした。

### 一、戦前の状況

入植以来、満州佐伯村の建設は順調な歩みを続けていた。

佐伯開拓団は、昭和十六年二月、満州の穀倉地帯たる四平省昌図県宝力鎮地区に入植、立地条件に恵まれ、建設、経営も順調に進展し、昭和二十年は五ヶ年の第一期建設計画を完了し、教育・産業施設も完備し、

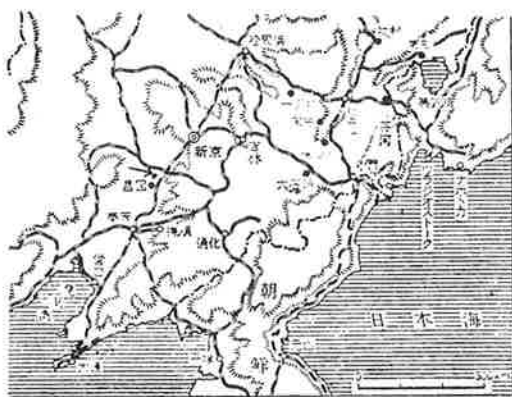
農家生活も漸く豊かとなり、入植以来の血ののにじむ苦  
難も酬いられんとするとき……

手記は、このような感慨をこめて書き出されている。  
前にも記したが、満州佐伯村は、昭和初期の農村不況  
の後遺症に苦しむ原南西部七ヶ村（明治・上野・切畑・  
中野・因尾・直見・川原木）の農村経済更生事業の一環  
として計画され、二・二六事件の後成立した広田内閣の  
手になる『満州農業移民百万戸計画』の国策に組み込ま  
れ、昭和十六年二月、第十次昌図佐伯開拓団として、四  
平省（現遼寧省）昌図県桜桃村に入植した。ここは満州  
のウクライナと呼ばれる南部穀倉地帯の一画にあり、肥  
沃な土壌の上に、稲作に必要とする水の利が確保されて  
いた。

もともと満州農業移民は、対ソ有事の際、軍の後方を  
支援する隠された目的を持ち、その入植地は重要な作戦  
正面と考えられる北部及び東部の国境地帯に集中し、南  
満に配される例は極めてまれであった。しかし、日中戦  
争の前述に陰りが見え始めると、かいらい国家の中枢を  
占める日系人の食糧（米）確保が重要な課題となり、あ  
らためて首都近くに稲作重点の農業移民を入れる必要が

生まれたものと思われる。

入植現地は、当時の南満州鉄道連京線（大連―新京）  
の奉天と新京のほぼ中間の昌図駅から北西に陸路五三キ  
ロメートルの所にあり（手前四キロメートルには山口村、  
八キロメートルには最上郷が入る）付近の標高は一〇五



ないし一二二メー  
トル。一望の平坦  
地で、西側を遼河  
の大きな支流が流  
れ、その東側河岸  
一帯の沖積土に、  
満州土地開発公社  
の造成した水田用  
地五六〇ヘクター  
ルと、満州拓殖公  
社の買収した既耕  
の畑地三・一三七  
ヘクタールが用意  
されていた。異例  
とも言える恵まれ

た条件の地であった。

ところが、昭和十八年に勤勞奉仕隊員の持ち帰った資料によると、三年を経た佐伯開拓団の入植戸数は僅か一〇三戸に止まっていた。社会情勢の激変が大きく影響したのである。何れ崩壊する運命にあったとはいえ、農村経済の再建と結び付けて分村移民を実行するには、その時期が遅すぎたと思われてならない。

慢性的な農村不況の原因を、農家戸数の過剰と耕地の絶対的不足による過小農経営にあると見て、「区域内の、おおよそ三千戸と考えられる農家の内、その一割に当たる三百戸を満州に送り、残された側の経営改善を図るとともに、送られる側にも責任ある指導者を付して第二の郷土を築き、その自立を達成させる」という、県南、西部七ヶ村のいわゆる『満州佐伯村建設計画』は、構想された時期までは、それなりの意義をもつものであった。

ところが、計画が具体化に向かう段階で日中戦争が勃発し、やがて長期戦の様相を帯び始めると、若者のみならず一家の大黒柱と託される人々も次々と軍隊に徴集され、あるいは徴用されて工場に送られ、にわかにならざるに悩む事態となり、村から後続の移住者を得ることは

非常に難しい情勢へと変わったのである。

その中で、ともかく先遣隊の要員確保には成功し、一年の訓練を経て、昭和十六年二月、前記の地に建設の第一歩を踏み入れたが、追い討ちをかけるかのごとくその年の暮れ近く、わが国は米英をはじめ全世界を相手とする無謀な戦争に突入し、国内の動員体制は一段と強化され、満州佐伯村の建設を支える母村側の移民送出体制は大きな揺らぎを見せたのである。戦争インフレの下で、昭和不況の影はとつくに姿を消し、もはや農村経済更生運動の意義は失われてきた。

だが、満州佐伯村の建設は一地域の問題ではなく、それは後退を許されぬ国策上の要請であった。戦争が重大な段階を進むほど満州の戦略的重要性は高まり、前にもまして大量に、かつ急速に日本人農業移民を入れる必要に迫られた。

この要請に応えるごとく、第一次本隊の送られた翌年には、応募区域を佐伯市、南海部郡全域に拡大し、また農業者以外に商工業よりの転廃業者をも含ませることにし、この上で県は管下の町村に対し、移民確保の強力な指導督励を行った。その結果が、なおこの一〇三戸に止

どまったのである。

開拓現地では、厳しい内地側の情勢を踏まえ、当初の計画（二〇〇戸規模）を縮小し、当面二〇〇戸の目標で再出発することにした。

翌十九年には、苛烈な戦争下、五二戸が入植した。この大部分は、前年秋県下を襲った大水害で家屋田畑に壊滅的打撃を受けた因尾村の人たちであった。

二十年は少なかった。戦況が余談を許さぬまでに悪化したからである。

こうして、送る側の条件は、発足の直後から極めて厳しいものとなったが、送られた現地側には、戦争は寧ろ促進要因として働き、人員の不足にもかかわらず建設は非常に順調に進み、昭和二十年には第一期五ヶ年計画を終了して、翌年には待望の「満州佐伯村」が誕生する見込みであった。

団員たちの生活は安定していた。入植年次の浅い人は別として、団員の大部分は水田一町四反歩、畑七町歩を所有する自立農家となり、希望に胸を膨らませながらその経営に熱中した。畑の多くは中国人農家の小作に出し自分たちは水田の稲作に専従した。水利と日照に恵まれ

たこの地区の稲作は大きな成功を見せ、その収穫は重い供出割り当てを消化してなお十分な飯米を残すことができた。そして小作より入る雑穀と合わせ、その販売代金が団員農家のふところを温めた。永年の労苦はようやく報われようとしていた。

団員農家の自立と並行し、共同施設の建設も順調に進んだ。本部は中央に移転し、購買部・診療所・精米所・煉瓦工場が設けられ、煉瓦造りの国民学校校舎と教員住宅も完成し、佐伯神社、納骨堂も建立された。そして待望久しかった焼酎醸造場の開設にも成功し、漸く村らしい形を整えていた。

団の幹部にもゆとりが生まれ、団長矢野武吉は、四平省下の開拓団に推され、満州国協和会全国連合会議の議員に選出された。国会を欠くこの国にあって、民意を代表する唯一の重要な会議として、議員には相応の名誉と権威が与えられたから、本人もやはり、これまでの苦勞が報われたという感懷を抱いていたに違いない。

つづく